日本女医会誌
復刊第50号

汎太平洋東南アジア婦人会議参加の感想

副会長　山崎倫子

桜の蕾もふくらみ、木々の梢も色づいてきました。平和な春の訪れとはうらはらに何と慌ただしいこの頃でしょうか。特に〝軽井沢山荘事件〟や〝連合赤軍リンチ殺人事件〟は誠に心の痛むショッキングな出来事でした。

会員の皆様にはいかがお過しでいらっしゃいましょうか。

すでにお手許に連絡がありましたように、五月十四日（日躍日、翌十五日は沖縄返還記念日で祝日）静岡県支部のご協力により熱海で総会が開かれることになりました。総会は一年間のしめくくりであるばかりでなく来るべき一年間の計画を審議する大切な会合です。それに来年は役員改選期に当りますので、この総会で役員選出に関する細則改訂案が提出され審議されるという重要な議事もございます。又日本女医会の事業のひとつとして〝性教育〟を取り上げておりますが、今回は会員からの要望もあって、性教育に関する講演が予定されております。一年ぶりで全国各地から集まる友人達との出会いも楽しいものです。是非多くの会員諸姉のご出席をお願い致します。

×　×　×

さて、私汎太平洋東南アジア婦人会議に出席するため一月七日からニュージーランドへ行って参りました。この会は汎太平洋地域及び東南アジアの吾々婦人が互いに理解と友情を育成し世界の平和に貢献することを目的とした会で、一九二八年第一回国際会議がホノルルで開かれ、それには吉岡弥生先生が出席なさいました。三年に一度開催されるのですが、今回はオークランド市で第十二回国際会議がニュージーランドのミセス、ニューカーク国際会長の許で開かれました。

日本からは、有権者同盟から三名、友の会から二名、看護協会から一名、日本委員会から副団長として大島清子氏、団長として私、の一行八名が代表として出席しました。

一月九日登録、会議は十日から二十一日まで十日間に亘って午前九時から十二時まで、午後三時から五時、夜七時から九時と正味七時間の大変きびしいスケジュールで行われました。登録人員二三〇名、参加国十六ケ国（オーストラリヤ、ニュージーランド、フィジー、トンガ、アメリカサモア、西サモア、クック島、マーシャル、フィリピン、シンガポール、印度、台湾（中華民国）、韓国、日本、ハワイ、アメリカ）でした。

テーマは、〝現代に於ける家庭の役割〟で毎日各国代表から自国の紹介及び議題に沿った状況の報告が行われました。各国に一時間半が与えられており、その利用方法は自由で、展示、スライド、映画、講演、報告、劇、歌と踊り、ファッション、ショー等、いろいろな形式及びその組合せで行われました。日本は第一部としてスライドを見せながら婦人の地位と現状についての講演を私がしました。第二部は〝花と日本人〟という素晴しい映画を、第三部では折紙細工のデモンストレーションと指導を行い大変好評であったばかりでなく全員を興奮の渦に巻きこみました。南太平洋の島々の多くは天生の美声とポリネシア民族独得の歌と踊りや劇でさながら芸能大会のようでした。各国それぞれのカラフルな民族衣裳の美しさも格別でした。

他に、一、家庭内の諸問題（教育、家計、老人の位置、躾等）二、地域社会に於ける特種な問題（精神、身体障害者、老人福祉、就学前児童の保育、アルコール及び薬物中毒等）三、家族に関する法律、四、公害、五、青少年問題、等のサブ・テーマについて小グループに分れて連日研究討論会が行われました。

生活様式や程度、経済力、教育等国々によって大きな差があるため、同じ問題でもその実情も取り上げ方も受け取り方もさまざまで論点の交叉しない事もありました。繁栄の代償としての汚染、公害、青少年問題は文明国の最大の悩みですが、やがてはその影響も

→オークランド大学文学部の前で

避けられない運命にある開発途上国にとっては今回の討議研究はよき警告になることと思いました。

文明社会では家族の核化が一般的になってきておりますが、まだ大家族制度を保ち、三世代はおろか四世代更には親類縁者までが共同生活をしている国々も多くありました。働ける者が、又収入のある者が他を養うといった原始共産的な生活に何の矛盾もなく、手のあいた者が老人、子供や病人の世話をするというあたたかな習慣が自然に行われています。嫁姑はおろか、親子の関係すら冷淡になりつつある現状を思うとき、文明は人間を利己主義にし、あたたかな人間関係をも破壊してしまうのではないかと淋しく感じました。

青少年問題はどの国にとっても深刻な問題ですが、特に世代の断絶は救い難いものになりつつある印象を受けました。一夜総会でニュージーランドの若者のグループと話しあう機会があり又翌日の討論会にも参加して貰いましたが、彼等の考え方や行動に驚ろかされ、また考えさせられました。――親許から離れて仲間（男女）と同居、所謂コンミューン的共同生活をしている若者の多いこと――親を尊敬するが時に顔を見るだけで充分、一諸に暮すことは窮屈で呼吸も出来ない――共通の話題など存在しない――現代にもっとも必要なのは友達、仲間である。――共同生活には当然男女関係も生じてくるが、そこに Care（愛といたわり）があるならばそれでよいのである――妊娠しても結婚しなければならないとは考えない――結婚とは単に紙きれに署名するだけのこと――愛する男性の子を産むことは幸せである――万一事故などで子供が残されたら仲間でその子を育てたい――等々私達の理解をこえた意見が多く、年代の差をつくづくと感じさせられた次第でした。

ニュージーランドは北海道を除く日本全土と略同じ面積に人口三〇〇万弱の非常に豊かで、社会福祉の行き屈いた国です。その故かどうか私生児の出生率は世界一の高率だそうで、その美

しい静かな環境からは一寸想像が出来ませんでした。尤も法律的には私生児という扱いは昨年からなくなっていますが。勿論妊娠中絶は認められていないし、避妊法についての教育や指導を受ける機会や場所もないようでした。ニュージーランドに限らず未婚の母親の問題は今後ますます大きな問題となることでしょう。

いろいろの国の人々と言語の困難をこえ、胸を開いて語りあえるなごやかなムードが終始流れており、特に対日感情のよいニュージーランドでの滞在はせわしかったとはいえ非常に楽しいものでした。

果てしない青い空、美しい樹木と花々――泰山木、色さまざまの紫陽花、ホクシヤ、ジヤカランダ、爽竹桃、ダリア、ゼラニウム、オーストラリアンゴム、澄みきった空気、そしてあたたかな人情、きびしかったスケジュールも楽しかった出来事も国境を越えた友情と共に何時までも心に残ることでしょう。

次期大会は一九七五年韓国のソウル市で開かれることに決定、次期国際会長には韓国のドクター・M・リーが選出されました。私も副会長の一人に選ばれなお且つ次期国際会議の計画委員長に指名され、大変な任務に今から頭を痛めています。テーマは、"Women and the Environment" に決まりました。

意を尽しませんが以上報告と印象を記しました。

□　□　□

理事会議事録

日　時　昭和四十七年一月二十二日
　　午後三時
場　所　日本女医会会議室
出席者（敬称略）
三神・川那部・小俣・中西・久保田・柳瀬・丸山・上田・小野・守安・佐野・荒川・湯本・山本・森川・阿部・真鍋・鈴木・山口・長池・福永・佐藤・戸田・八木・佐藤
欠席者（敬称略）
山崎・大原・森・中村・白橋・綾仁・松岡・橋本・稲葉・石田・添田・栗原

一、庶務報告（柳瀬常任理事）
○会員物故者
46・12・14　勝俣栄子（群馬県）
46・12・31　掛札たき（北九州市）
47・1・13　福田　幹（東京都）
物故会員に対し弔電ならびに香典をおくる。なお福田名誉会員の逝去に際しては日本女医会及び理事一同より生花一対をご霊前に供えた。
○寄　贈　本
万博協会より「日本万国博覧会記念写真集」埼玉県教育局保険課より性教育の手びき」、日本母性医協会より「混乱する性教育へのアプローチ」
○46・12・14　ルーペンダン年末特別セールの案内書配布
○47・1・21　NGO国内委員会へ中川常任理事出席
○印度救癩特別演奏会（N響）への協力依頼の件

二、会計報告（中西常任理事）
46・12月分の会計報告別紙の通り。

三、議　題
①年金事業推進について
（守安常任理事）
会員の加入を倍加するため安田信託とも話し合って再び勧誘状を発送したい。それらの費用は安田と半々位の分担にする事も可能と思う。（可決）
②国際女医会について
（佐野国際連絡書記）
パリ大会参加者は現在19名・会議だけ出席する者2名。本部よりの同行者は小野国際女医会副会長・佐野連絡書記・報告者藤井儔子が決定。
一九七二年国際女医会費は一月末払込完了。
日本の報告は第一日に行われる。
昨年暮、日濠協会会長ミセス・ギヤァレット女史来日さる。
（了承）
なお会長より国際女医会への同行者について「会長・副会長という事でなくその都度理事会が詮衡しては如何」との提案あり。可決す。
③定款施行規則一部改正について
（小俣副会長）
持越になっていた第四条について次の提案がなされた。第四条（理事の当選基準は所属同窓会に関係なく6名。至誠会、鶴風会、加多乃会よりそれぞれ9名。その他の同窓会より2名とする。）（可決）
④その他――
○吉岡賞受賞候補者について
（会　長）
昨年末〆切で現在三件あり。学術面で出ている東京女子医大薬理学助教授藤井氏の審査については、薬理学の審査員が直属教授一人なので今回は辞退を申し出られた。そのため東邦大・関西医大の薬理の教授にそれぞれ依頼したいが如何。（可決）
○高知県支部長よりルーペンダン特許権を女医会に委譲された小出つる子会員のその他の女医会への協力をも含めて功績をたたえて貰いたいとの申出あり。吉岡賞とは別途の日本女医会協力賞というようなものを設けては如何。（会長）
日本女医会功労賞（仮称）の設定を可決す。常任理事会で立案する事とす。
○ルーペンダンについて
（佐藤千代子理事）
日本女医会誌発送時、ルーペ注文の振替用紙を同封したい旨発言あり。
年間適当の時に同封することに可決。
○新卒業生入会勧誘について
（会　長）
本人宛と各医大教務課宛の二本立で入会勧誘状を発送する事可決。
○性教育の問題に関連して
（阿部理事）
タンポン使用の問題について各婦人科教室へアンケートを求めては如何との発言あり。小委員会を作り、求めるアンケートの綱目を考えることと座談会など計画しては如何ということに決定。
（文責　柳瀬）

福田幹子先生を！

大村ひさゑ

昭和四十七年一月十四日朝「福田の母が亡くなりました。昨日午后五時に眠っているように亡くなりました」という電話に、吃驚してしまって私には何んとも言うに言われぬショックであった。いつも私の顔を見ては「貴女に葬儀委員長の重い役目を頼む」といわれていたが、その私がもう七年も前から脳卒中で右の手足と言語障害とを起してしまった。明日は十五日である。葬儀は午后二時から三時までという話であるが今日のように暖かである事を願っている。

先生は時々私を見舞ってくれては色々の事を話して帰えられた。時には伊豆の方へまで足をのばしてくれたが、その時に先生は私の病室にいて四方山の話をした。その間御子息の平先生は御夫妻で韮山にある太郎左衛門（大砲をはじめて造った人）の墓や屋敷の跡

を尋ねて来たとの話であった。

先生と私とは牛の歳であるというのかとてもウマが合うというのか随分仕事をしたものであった。

もう卅七、八年もの昔であるが私達は月に一度づつ、今は文京区になったが、杉田つる先生のお宅に集ったのであった。その時に、必らず田川澄子先生、佐藤やい先生とそれから先生と私の五人であった。日本女医会の原稿を纏める仕事であった。なかなかうまくゆかないことであった。

時には編集がよくいったから詩友ではないが日本女医会の原稿友人とかなんとかいって洗足の池の辺りへ五人でいった事もあった。池の中央に一寸した祠があり、お稲荷様がまつってあった。帰りに児玉琴枝先生のお宅へお寄りして西瓜をご馳走になったのである。

杉田つる先生、田川澄子先生、佐藤やい先生その次には今年一月十三日まで生きていられた福田幹子先生が亡くなってしまったのである。私一人が取り残されたような気がして淋しい。

終戦の直後であったが先生と私とにこんな事が起った。日本女医会誌も元のままでは駄目である、ということである。先生と二人して色々の案を集めて見たが、しかし字は吉岡弥生先生のものとしたいというので一致し、三日間でようやく今の日本女医会の表紙をつくったのであった。字の廻りに何か入れたいと思って、それも今のようなものが出来たという工合である。

何んでもないことのように思うが、さて拵しらえるという事が如何に大変であるかは、これ丈でもわかるようである。

先生は終戦後暫くの間、河田町の病院の中に寝泊りしていた。平先生はまだ学生であったが先生を中心に平先生と私とは世の中の事、思想の話、和歌、俳句など話題も豊富であった。今でもそのときの事が心の中に時々浮んで来るのである。

先生はそれから直きに新築した今の場所へ移ったが、医務課長としての責任上、なお四年以上河田町の病院へ通っておられた。私の家から柿の木の小さいのや山茶花の木をもっていった。今、その柿が珍らしく非常に沢山の実をならせているが山茶花はここ二、三年は公害を受けて咲かなくなってしまったと、十一月のお手紙に書いてあった。

昨年十一月十三日は実は私の誕生日で満七十歳になった。病気である私は七十才になったとて別に祝いをするというわけではない。ただ常日頃、長い間ご親切に身心両面で特にお世話になった先生や、親しい人々に全快ではなし、ほんのしるしとして一寸のものを差上げたのに、皆様からは不相応なよい物をお届けいただいたのである。それにも増して先生の御送物は、それはそれは大物であった。童児が牛の上に乗ってそれが黒塗の石の上に置いてある、何んともいえない立派なものである。

「終戦以来、日本橋の三越へは行った事がなかった。今日は芳郎（長男芳郎先生）に連れていってもらって三越へ行って来た。三人の子供（芳郎先生東大国文科、平先生東大法科、律子先生女子医大）と私と親子揃って今日のお祝をと」書いてある手紙であった。嬉しいやら勿体ないやらで涙で一杯になった。その終りに

我が命、山鳥の尾のながながと
生きながらへて思うことなし

という自作であろう和歌が書いてある。その通り今はもう立派な子孫は出来上っているし、医学医業の仕事も悉がなく終ろうとしている。ほんとうに楽しいものであるとの歌の文句であろう。

それなのに、その後二ヶ月を経て日付は同じ十三日、一月十三日、先生は眠るが如く瞑目なされたものである。しかし

先生、幽明境を異にしていても、いつまでもいつまでも、日本女医会をお守り下さらん事をお祈り申し上げる。

開業医雑感

日本女医会広島支部
青木豊子

日本女医会の会誌に投稿させて頂ける機会を得ましたことを、心から感謝いたします。

私は、田舎の片隅で、ボツボツと開業しているもので、時には学校医ともなり、時には産業医ともなって、社会とも連繋を保ちながら、戦後の日本の歩みと共に地域の医療に従事してきたと自負しているものです。その私の見た現代の医療問題についての雑感を述べさせていただきます。

〔現代の医療について〕

(1) 私は卒業して二十六年になりますが、学校で習ったものの中で（医学校）役に立つものといえば「勉強の仕方」と「医の倫理」だけといえば、これをお読みになった私の恩師は嘆かれると思いますが、これは師の故ではないと思います。私の不勉強もありますが、それ程現代における疾病の変遷が急速であること、Bacillus から Virus へ、そして医原病まで加わって総花的にひろがっている疾病。

(2) 疾病を予防する予防医学の台頭。

(3) 第三次産業の発達に伴う職業病の出現。

(4) 医学の進歩に加えて、人口の自然増、とくに老人が増加してきたこと。

(5) 保険制度が社会と共に発達して、受診者に拍車をかけたこと。

その五つの中で、昔と変らぬ医学部の数では供給は需要に追いつきません。稀少価値となって人の良い私共は大なり小なり神風医者となっていたことに気付いたという次第です。

〔世間の目〕

ところが、世界の目は、ジャーナリストを先頭にして私共を俎上にあげて来ました。

医者、巨者という字を作りました。字が違っても、全部医者と読むそうです。医者は原始的感情である「やっかみ」、国民総被害妄想等の精神病的な視野からも異常に歪められて、マスコミにのせられて来ました。

併し日本の医者は、ヨーロッパでは30年間でなしたことを10年でやり、平均寿命を50才台から70才にぐんぐんあげてきました（厳密にいえば医者だけの力ではありませんが）。はからずも人間尊重時代に生命を守ったということは、国民全体が感謝してもよいと思います。経済の高度成長と国民総生産世界第二位とは、公害という癌をもってはいますが、平均寿命が伸びたことにつながるところの医療費の増大は、公害に比べれば大したことはないと思います。命をまさしくお金で買ったのですから。

それにもかかわらず世間の目やジャーナリストは、なぜ、かく私共をたたくのでしょうか。

〔原点に帰り手をつなぐ〕

そこで頭を冷やして冷静に来し方、行末および周囲との横のバランスをみると、やはりなんだか歪んだものを感ずるし、世間の目にも真実は確かにあると気付きます。

昔からある諺に「医者寒からず儒者寒し」ということがあります。私は国語の方は余り上手ではないのですが、この諺の意味はどうも、人の身体だけ診察して病気を治す医者は世間の人からありがたいありがたいといわれ、その上身入りもよい。一方人の道を説く儒者は、人としてなすべき道を説く者で誰でも人は自分のしていることを良

いと心得ているのであるから、他から悪いといわれると腹がたつのが当りまえのようなもの、昔の日本の歴史をみても、儒者が生きている間に報いられた人は少く、死後に立派な人であったと解ることが多い、ということを意味しているので、医者の利点はここだと思います。こんどの新点数改正では、新しく慢性疾患指導料というのが新設されました。これは多分に儒者的要素を含んでいます。例えば、糖尿病の患者に含水炭素は制限して下さい、甘い物はへらして下さいなどというともう来なくなります。それを医者的に含水炭素は毎食米飯一杯づつとし、あとはおきかえていけば何を食べてもよいといえば患者はよろこんで来院します。言いようで同じことですが。

この医者の利点を悪用しないで邪心を除いて患者のことを考えるのを原点にかえったということだと思います。即ち医の原点にかえって一人一人の患者にあたり、そして医師相互の信頼を大切にし、医者からも、患者からも信頼される人にならねばならぬと思います。

医者相互の信頼ということでは、「白い巨塔」にも書かれているように、確かに学閥は現在も根強く残り、男の医者にはそれがなお著明に見うけられます。○○病院はT大系、○○病院はK大系というように。そしてお互いに相手方と反目する。女医の方は、母性的軟柔性をもって余り著明な学閥はないようですが時としてムラムラと芽生えるようです。ここで全国でも珍しい例と思いますが、広島県の日本女医会では一部の志を同じくする者が、年令、学校、その他あらゆる違いをのりこえて、毎月一回勉強会（医療、家事、育児、旅行、ファッション、悩み）をして手を握り、助け合いやっているのです。喜びはわければ二倍になり、悲しみはわければ二分の一となるということを実感として得ています。

〔これからの開業医は〕

(1) これからの開業医は、人間の健康管理者として第一戦での、第一スクリーニング者としての使命があるので、大病院の勤務医より学問的には上でなければいけない。そのためにはわれわれ開業医はもっとそれに適した勉強をしなければならないと思います。

(2) 人間的に患者と密接な関係にあり、あらゆる善意による失敗は徳により帳消しされるような徳のある人間になりたいと思います。

(3) 世間の甘やかしにあまえず、自分の立場をみつめて常に相手の立場で物を考え、処理しなければいけないと思います。

えらそうなことを書きましたが、全部私にいいきかすことです。やはり田舎では視野がせまく、ものをみるに色眼鏡で見ていることもあり得ます。しかし、いくらかの真実もあったでしょうか。

何はともあれ、日本の女医は手をつなぎ、共に社会のためになる良い医者になり、世界の女医にも呼びかけて、全世界の人々の杖となろうではありませんか。

以上

庶務部会の記

柳瀬路子

◐

それは寒い冬の日だった。暖冬の東京の空に珍らしく寒波が押しよせて、東京がこんな具合では、冬の厳しいと聞いている名古屋はさこそと思いやられ、超特急〔ひかり〕に乗り込んだ面々はいづれもパンタロン・冬のオーバ・防寒靴といふいでたち。「格式高い宿であるから」という世話人森川先生のお達しが頭に残って恐る恐る名古屋駅頭に降り立ったものであった。

暮れなづんだ駅前の百米道路を上る。ブーケのようなセンターラインの照明灯が美しい。区画整理された広い道路を左折、城に近い白壁町の〝か茂菟〟を探し当てた。三月二十六日午後九時。

◐

定款施行規則一部改正が理事会の議題に上り、其叩き材料の作成を庶務に委嘱されてから半年になろうか。第一次案を九月の理事会に提出する必要上、仙台の長池理事のところで七夕を当てこんで開いたので第一回の庶務部会であった。あの時は松島のモダーンな長池別邸で、時間にせかれず胸襟をひらいて語り合ったせいか談論風発。各々知る限りを論じ、叩き一致点に達すると破顔一笑次に移るというやり方で、延々三時間余、夜半に及び、草案もまとまったがお互いを知る上で所期以上の効果をあげた。それに気を良くして、一同お小遣いのかかるのも厭わず、東京・名古屋と部会を重ねている。理事会より差し戻しの試案を煉ること三回、半年間。その議案が漸く理事会を通って今度の総会で会員諸姉の決裁を仰ぐ段階に達した事は私共として光栄の至りである。

か茂菟にて……

◐

メンバーをご紹介すると、庶務担当の副会長は小保喜久子、女医会二十年のキャリアを持ち気鋭の面々達をぎょしていつも逆らわない。常任理事の森千鶴しかり、温顔慈眼いつも若い者につきあって下さる。これに加えるに名古屋の重鎮森川みどり、これ又眼科医会歴年理事のキャリアを以て法的措置のこと前例のこと、発言に充分の重味を利かせて下さる。つづく面々は前副会長の松岡宏子、仙台医師会ベテランの長池博子、函嶺の智将福永ひろ子の三博識と新鋭のペット石田妙子。誠に豪華絢爛のオールスターキャスト。席を連ねる私も誠に至福といわねばなるまい。

◐

この会合を通じて一番印象に残ったことは、お互いを知る事の大切さであった。いづれも各界を代表する一かどの人物であることは論を待たないが、触れ合う事によって銘々の持つ、自分で築き上げた現在位の重み、琢磨された人格を認識し合って、お互いに尊敬の念を持ち、その言う事に耳を傾けるという事がどんなに会の運営に大切なものであるか、という事を感得した。これは余談になるが国際女医会が日本に誘致される段階に立って、本会も三神会長の下、一致団結してその準備にかからねばなるまいが、大変な事だと心配しておられる会員も多いと思う。しかし庶務の部会を通じて私の感ずる事は、流石女医さん。立派な能力を持ち、やる気充分の方々ばかりで、案ずるより生むが易かろう。各人が和を以て各々の水を得られて泳ぎ出されれば必らず立派な成功を収めるであろうという事である。

◐

名古屋は思いのほか暖かく、翌日はオーバも不要な位であった。愛車を馳って「てっちり」の会に走せつけて下さった佐藤千代子理事の御厚意で名に負う名古屋城をも一見、森川、佐藤両理事の御厚意に感謝しつつ午後三時半の〔ひかり〕で帰京。庶務中京の会を終った。

◇　◇

歌舞伎『額田女王』を観て

川崎市
稲生　襄

日本女医会神奈川県支部では事業部の企画として今年一月から会員の土屋和子先生のご尽力により東京女高師ご出身の衣川舜子先生を講師に迎え、毎月第二と第三水曜日の午後一時半から三時半迄、横浜駅西口三菱信託銀行三階会議室を会場として約十名が熱心に万葉集講義を受けております。すっかり万葉づいた矢先本年二月の歌舞伎座にて新作『額田女王』が上演されるのを知り、待ってましたとばかりに二月十三日(日)同僚と出かけ観て参りましたので一寸書いてみたいと思います。

前日の朝日新聞の評に(河竹登志夫)「万葉の情感に欠ける。題材生かして再演して欲しい」と出ておりどうかなと思いましたがなか〳〵ドラマティックに面白くできており、登場人物は若々しく役にぴったりで舞台は素晴らしく綺麗ですし、現代の若人がみても誠に楽しまれる作品で、まづまづのように思い忙しい中を行ってみた甲斐があったと喜んだ次第です。

二月末からインフルエンザの流行にて物凄い忙しさとなり、観劇どころではなかったが本当にそうなるチョット前だったので何とよい時だった事よと一人なかなかさめやらぬ余韻(よいん)をたのしみました。

数奇な運命を歩む悲劇の女性と兄弟の愛の苦悩と葛藤を万葉の香り高い歌を入れ乍ら語って行く。複雑な時代背景を簡潔に処理してわかり易い構成にし、新鮮でソフトな感じを与えてくれます。この作品は源氏物語に次ぐ現代歌舞伎と云えるでしょう。演出は文化庁長官今日出海さんです。

配　役

額田女王（ぬかたのおおきみ）　菊之助
中大兄皇子(なかのおおえのおおじ)　海老蔵
大海人皇子（おうあまのおおじ）　辰之助
大友皇子（おおともおおじ）　薪水
十市皇女（とうちのひめみこ）　芝雀
中臣鎌足（なかとみのかまたり）　権十郎
蘇我赤兄（そがのあかえ）　菊蔵
鏡王女（かがみのおおきみ）　門之助

あらすじ

約千三百年前、即ち第三十五代皇極天皇の御代のお話です。

土地の王族鏡王（かがみのおう）の次女にて十六才になった額田女王が姉の鏡王女と庭で話をしている所へ時の皇太子中大兄皇子の弟、大海人皇子が（額田女王に心をひかれている）訪れてくる場面から始まります。額田は歌を作ることと舞に秀でているのみならず、美貌で有名な人でした。或時中大兄皇子は鎌足に額田の姉の鏡王女をめあわすために彼をつれてこの家に尋ねて来て、額田にひどく魅せられたのでした。その年に蘇我入鹿征伐をやり大化改新も行われ、中大兄皇子によって日の本の国がためも実行され、孝徳天皇から皇極天皇（女帝）が即位され十六年の歳月が流れます。

百済（くだら）を助けるため、新羅（しらき）征伐に行くのですが、その時には既に大海人皇子と額田女王は結ばれて十市皇女（とうちのひめみこ）という娘も出来ています。そして十市皇女は中大兄皇子の長男の大友皇子と許婚になっている。

新羅征伐に行かれる女帝(斉明天皇)のお附きとして額田女王が同船させられるのですが実はこれは蘇我赤兄（そがのあかえ）の陰謀だったのです。叔父の入鹿を滅された赤兄は額田を大海人皇子から離し、中大兄皇子に思いをとげさせて観心を得て次の皇位に大友皇子を据え、入鹿の如く専横な振舞いをしたかったのです。

大海人皇子の不吉な予感が当ってとうとう額田は船上で中大兄皇子のものになってしまうのです。

新羅征伐は唐が新羅の後援をしたため、敗戦となる。中大兄皇子は大和に帰り次いで大津の都を建て政治に専念します。額田は後宮に入れ大海人皇子には返しませんでした。

中大兄皇子が天智天皇となられた五月に蒲生野（がもうの）に薬符りに行きます。そこで七年振りに大海人皇子と額田は会うのです。

額田からの歌

茜（あかね）さす紫野ゆき　標野（しめの）ゆき
野守は見ずや君が袖振る

紫草の作ってある野、天皇様の御料地の野をあちこちに行き、野守が（標野＝一般人の入ることを禁じた野で、ここでは紫野と同じ、＝の番人）見るではありませんか、まあ、あなたは袖を振ったりなどなさっての意。

大海人皇子からの答歌。

紫のにほへる妹（いも）を憎くあらば
人妻ゆえにわれ恋めやも

紫の様に美しいそなたが憎かったら、人妻なのに何で恋などしようか。（憎からず思えばこそ恋心に堪えられず袖をふりもするのだ）

〝にほふ〟は色の映えるということ。

〝妹〟は女性の親称、きょうだい、恋人、妻、そのほか他人でもいう。

大海人皇子は馬をとばしてかけつけてきて額田にもどってきてくれとせまるが、どうしようもなかった。そこへ天皇が鎌足と現われ大海人皇子をやさしくなだめ次の天子となる皇子として助力を頼むといわれる。純情な大海人皇子は納得して三輪の里へ帰る。旬日の後大津の宮の浜楼で唐の使節への祝宴が開かれる。そこで次の天子は長男の大友皇子にしたいと聞かされ大海人皇子は激怒する。兄弟の中は不穏となる間に三年経ち天皇は病魔に侵され重体におちいる。

兄の危篤を耳にした大海人皇子は兄弟の情にかられて兄を見舞う。そこで兄から次の天子になってくれと云われるが断る。そして僧侶になって大友皇子を後見すると云う。吉野に行き読経三昧に暮らしていると大友皇子を天皇にした蘇我赤兄一派は何としても大海人皇子が邪魔になると吉野へ進軍します。はじめは信じなかった大海人皇子も赤兄等の陰謀と知り出馬することになる。世に云う〝壬申（じんしん）の乱〟なのですが（戦前の歴史の教科書にはのっていない）赤兄等の敗戦となり弘文天皇（大友皇子）は二十五才の若さで自害する。

額田女王、十市皇女は大津の宮に監禁されていたが無事救出されます。折から大海人皇子も馳けつけて甥の天皇の死を嘆く。

額田女王にとって大海人皇子の許へ帰れる日となったのですが、女王にはもうその喜びの心さえ起らない。「わたしの歌には、もう昔のように大空を翔ける翼がなくなってしまいました。……この世で一番尊いお二人のお方の間に、揺れ動いた私の心、私の身体、せつない、悲しいその時々の思い出が今ではむしょうに懐しく、はるかに遠くなってしまいました。今に私は歌を忘れた鳥になりそうです」と云い乍らドラマは終るのです。

▽△　▽△　▽△

その後の額田女王はどうなったのかと井上靖氏の野心作〝額田女王〟（＝毎日新聞社刊）を求めて読んでみました所

近江の都は打ち棄てられ大和へと移った。そして大海人皇子は飛鳥浄御原宮（あすかきよみはらのみや）にて帝位につかれ天武天皇となった。

天武三年亡き天智天皇の山科陵の造築成った時額田の作

やすみししわが大君のかしこきや
御陵（みはか）仕うる
山科の鏡の山に
夜はも　夜のことごと
昼はも　日のことごと
哭（ね）のみを泣きつゝありてや
百磯城（ももしき）の大宮人は去
（ゆ）き別れなむ

畏れ多いわが大君の御陵を営む山科の鏡山に、夜は夜中、昼は昼中、大宮人たちは御陵造営の成ったいま、たゞひたすら泣きに泣いて、別れて行ったことでありましょう。

この歌を最後に額田の消息は史書から消えている。尚天武七年十市皇女が急死している。時に額田は四十代半ばに達していたということです。

以上が額田女王の一生なのですがお芝居は衣裳が大変美しく、殊にヒロインの額田は貴品があり、いつまでも瞼から離れないで困った。

唐の使者の招宴等も椅子式であり、又天智天皇の病室のベットなども現代風になっており奇異感を持ったが、当時は唐等からいろ〳〵の物資が入り、上流社会はあのようだったのかとも想像する。

おわり

□　□　□

秋田県支部だより

吉本ミチ

十月三十一日、支部結成以来久しくとだえていた支部総会を、秋大医学部福島峰子先生等の御尽力により、日本女医会理事　長池博子先生を仙台よりお迎えし、秋田市第一ホテルで開催しました。

於　秋田市第一ホテル

結成当時の会員の方だけでなく、秋田市在住の女医の方達にも呼びかけ二十名の出席をみました。

開会に先だち、長池先生のご厚意により、吉岡弥生先生の「道ひとすじ」の映画に、一同深く感激し秋大医学部の女子学生も共に観賞し心強く感じました。

ついで総会にうつり支部長及び役員の選出、支部会の規約などを審議し、長池先生より、日本女医会総会及びその理事会について、いろいろとお話をお伺い致しました。

九嶋貞佳先生の名カメラマンの記念撮影もすみ、懇親会は、自己紹介ではじまり、和気あいあいのうちに歓談がつづきました。

長池先生は、特急「あおば」で仙台にお帰りになり、会員一同も再会を約して、解散し滞りなく支部会を終りました。

その後都合で、ご出席出来なかった方達も続々とご入会になり、旧会員二十四名、新会員十五名と計三十九名の会員数になりました事を喜び合っております。

お願い

日本女医会誌　十五号、三十六号、三十七号、一〇三号
復刊　六号、十六号、十八号

をお持ちの会員の先生は、日本女医会本部までご連絡下さるようお願いします。

（東京女子医大図書館資料室）

ルーペンダン特別セール

次回の会誌発送が七月下旬ですのでサマーセール実施のご案内をいたします。

七月末日までのご注文の場合のみ特別価格でお送りいたします。

贈答用、ご中元にご注文願います。

ルーペンダン

（実用新案特許登録）

★からくさ
シルバー製　九千八百円（鎖付）
十八金製　一万四千九百円

★デラックス
シルバー製　九千八百円（鎖付）
十八金製　一万四千八百円

★プレーン
シルバー製　八千円（鎖付）
十八金製　一万二千円

★ペンダント型　金色枠　三千円
銀色枠　二千円

★クリップ型　金色枠　二千円
銀色枠　二千円

★何れも郵送料共の価格にて従来通りペンダント型、クリップ型に限り本会々員は右価格の一割引きです。

編集後記

いよいよ日本女医会総会の日どりも近づきました。主催の静岡の皆さん、さぞご多忙のこととお察しいたします。総会は全会員が年に一度一堂に会するよい機会、平常胸にいだく夢を互にかたりあうためにも是非参会いたしましょう。その日は五月十四日でございます。

福田幹子先生の「憶い出の記」をかつての本会理事大村ひさゑ先生から本部にお寄せいただきました。或時期を福田先生とご一緒にご熱心に日本女医会のためにご尽力下さいました大村先生に、とくに何かお書き願いたかったのですが、病後であられるので躊躇いたしておりました処、自からお書き下さいました。このことはご依頼申し上げてお書きいただいたのとはまた異なる意味をもっており、大変ありがたいことでございます。大村先生の本紙掲載文の通り日本女医会につくして下さった事に感激をいたしますが、右側麻痺を残しているご病後をもって左手をお使いになる努力をされ、まことに立派な筆跡をみせて下さいました。先生の原稿を拝見いたし、ご意志の強さをこの一事からもうかがい知り得て心強く、且感嘆いたした次第。この努力の文字もお目にかけたい程でございます。

（久保田くら）

昭和四十七年四月二十日印刷
昭和四十七年四月二十五日発行
編集人　久保田くら
発行人　日本女医会
発行所　東京都新宿区市ケ谷河田町19
社団法人　日本女医会
TEL（341）〇九六八
印刷所　東京都港区白金五-四-一
興栄美術印刷株式会社

題字　吉岡弥生